



Title	Synthesis, Magnetic and Spectroscopic Properties of Octahedral β -diketonato Nickel (II) Complexes with Nitronyl Nitroxide Radical Chelate
Author(s)	吉田, 高史
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40827
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	吉 田 高 史
博士の専攻分野の名称	博 士 (理 学)
学 位 記 番 号	第 1 3 6 4 0 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 10 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 理学研究科無機及び物理化学専攻
学 位 論 文 名	Synthesis, Magnetic and Spectroscopic Properties of Octahedral β-diketonato Nickel(II) Complexes with Nitronyl Nitroxide Radical Chelate. (ニトロニルニトロキシドラジカルがキレート配位した β -ジケトナトニッケル(II)錯体の合成と磁気・分光学的性質に関する研究)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 海崎 純男
	(副査) 教 授 久司 佳彦 教 授 大野 健

論 文 内 容 の 要 旨

<序>ニトロニルニトロキシドラジカルは安定なラジカルであり、これが金属イオンに配位した遷移金属錯体の研究が行われているが、Cu(II), Mn(II), Ni(II)錯体などの構造とその磁気的性質が中心であり、スペクトルに関する研究の系統的な報告はほとんどない。

2-(2'-pyridyl)-4,4,5,5-tetramethyl-4,5-dihydro-1H-imidazoyl-3-oxide-1-oxy(NIT2-py)は弱いルイス塩基であり、ニトロキシドのOドナー原子とピリジル基のNドナー原子で金属Mにキレート配位し、その遷移金属錯体は溶液中でも安定である。このNIT2-pyが配位した錯体の特徴的なスペクトルや、共存する配位子の変化に伴う磁性および分光学的性質への影響について興味がもたれる。

本研究では、種々の β -ジケトナト配位子をもつ $[Ni(\beta\text{-diketonato})_2(NIT2\text{-py})]$ (acac, acaCl, acaBr, bzac, dbm, tfac, hfac) と β -ジケトナト配位子の1つを N, N, N', N'-tetramethylethylenediamine(tmen) に代えた $[Ni(\beta\text{-diketonato})(tmen)(NIT2\text{-py})]^+$ (acac, bzac, dbm, tfac, bztfac, nptfac) を合成し、これらのラジカルニッケル(II)錯体における磁性および分光学的性質について検討した。

<結果と考察> $[Ni(\beta\text{-diketonato})(tmen)(NIT2\text{-py})]^+$ (acac, bzac, bztfac) の構造はX線構造解析より NIT2-pyのNO基のトランス位に β -ジケトナトが配位し、さらに bzac や bztfac のフェニル基側がトランス位に配位した *mer*-N₃O₃型構造であった。

$[Ni(\beta\text{-diketonato})_2(NIT2\text{-py})]$ (acac, acaCl, acaBr, bzac, dbm, tfac, hfac) および $[Ni(\beta\text{-diketonato})(tmen)(NIT2\text{-py})]^+$ (acac, bzac, dbm, tfac, bztfac, nptfac) は反強磁性相互作用を示す。これらの $[Ni(\beta\text{-diketonato})_2(NIT2\text{-py})]$ と $[Ni(\beta\text{-diketonato})(tmen)(NIT2\text{-py})]^+$ は特徴的なUV-visスペクトルを示す。13×10³ cm⁻¹付近の強度の著しく大きい吸収帶は、MCDスペクトルなどにより Ni(II)イオンとラジカルスピンのカップリングによって生じた³A₂-²L₀のS=1/2から¹E²L₀のS=1/2の軌道への遷移と帰属した。さらに、16~19×10³ cm⁻¹付近のバンド幅の狭い成分からなる強度の大きい吸収帶は、共鳴ラマンスペクトルなどから MLCT(t_{2g}→π*)遷移であると帰属した。

$[Ni(\beta\text{-diketonato})_2(NIT2\text{-py})]$ と $[Ni(\beta\text{-diketonato})(tmen)(NIT2\text{-py})]^+$ の吸収強度εとスピン交換定数|J|の大きさは、それぞれ β -ジケトナト配位子の違いによって変化し、それぞれのタイプの錯体でその傾向が異なる。このことは分子内における反強磁性相互作用と強磁性相互作用への β -ジケトナト配位子の違いによる寄与に

差があるためと考えられる。

また、 $[\text{Ni}(\text{acac-d})_2(\text{NIT2-py})]$ の $^2\text{H-NMR}$ スペクトルの温度変化から、 Ni(II) イオンと NIT2-py とのカップリングによるそれぞれのアセチルアセトナトのメチン重水素への影響の違いが確認された。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ラジカルを含む常磁性金属錯体における磁気・分光学的性質を解明するため、ニトロニルニトロキシドラジカル NIT2-py がキレート配位した一連の常磁性ニッケル(II)錯体を新たに合成し、それらの磁性と吸収スペクトルやNMRの関連性について研究したものである。これらの $(\text{NIT2-py})\text{Ni(II)}$ 錯体の反強磁性的な交換相互作用が、これまで考えられていたのとは異なった傾向の共存配位子による影響を示すことを明らかにした。また、これらの錯体ではいずれも特徴的な吸収帯が観測され、そのうち近赤外部付近のものは本来 Ni(II) 錯体の吸収強度の弱いスピンドル-d遷移に帰因するもので、新たに出現した可視部付近のものは金属-配位子電荷移動遷移と帰属した。近赤外部の吸収強度は電荷移動遷移の強度を借りることで増大することによって、これら一連の $(\text{NIT2-py})\text{Ni(II)}$ 錯体の磁性を系統的に説明できた。また、 $^2\text{H-NMR}$ シフトの温度変化によって共存配位子へのラジカルからの影響に違いがあることを明らかにした。さらに、ラジカル錯体の $^1\text{H-NMR}$ シフトは非ラジカル Ni(II) 錯体のものとラジカルの影響を理論的に考慮した項の積とよい相関関係にあることを見いだし、これに基づき交換相互作用定数を求める簡単な方法を提唱した。

以上のように、本論文はこの分野の研究の新しい局面を拓き、その発展に貢献するものであり、博士（理学）の学位論文として十分価値のあるものと認める。